

バッハ コレギウム ジャパン
マタイ受難曲

2025年4月 20日 日曜日
16時から19時15分まで 途中 20 分の休憩あり
会場 さいの国さいたま芸術劇場 音楽ホール

これは、読み上げ対応用の文字プログラムです。

主催:公益財団法人埼玉県芸術文化振興財団
後援:埼玉県合唱連盟
助成:文化庁文化芸術振興費補助金 劇場・音楽堂等機能強化推進事業(劇場・音楽堂等機能強化総合支援事業) 独立行政法人日本芸術文化振興会

プログラム

ヨハン セバスティアン バッハ（1685年生まれ1750年没）

「マタイ受難曲」 バッハ作品番号244

第1部と第2部の間に20分の休憩がはいります

（プログラム終わり）

出演者

指揮：すずきまさあき

ソプラノ1：ハナ ブラシコヴァ

ソプラノ2：やすかわ みく

アルト1：マリアンネ ベアーテ キーラント

アルト2、しょうにん1：あおき ひろや

テノール1、エヴァンゲリスト：よしだ しもん

テノール2：さくらだ まこと

バス1、イエス：ヨッヘン クプファー

バス2、ピラト：かく とおる

合唱と管弦楽：バッハ コレギウム ジャパン

ソプラノ イン リピエーノ：もちづき まりあ、あおき ひろや

ソプラノ

第1群

ハナブラシコヴァ

まつい あき(女中1)、もちづき まりあ

第2群

やすかわ みく

さわえ えり(女中2)

ふじさき みなえ(ピラトの妻)

アルト

第1群

マリアンネ ベアーテ キーラント

たかはし さちえ、たかはし ちはる

第2群

あおき ひろや

はやし まえ、ふせ なおこ

テノール

第1群

いしかわ ひろと、たにぐち ようすけ、なかしま かつひこ

第2群

さくらだ まこと

かがみ たかゆき(証人2)、みずこし さとし

バス

第1群

ヨッヘン クプファー

うらの ちゆき(ユダ)、こいけ ようすけ(さいしちょう1)

第2群

かく とおる

かとう ひろたか(ペテロ)

わたなべ ゆうすけ(だいさいしかやパ及びさいしちょう2)

フラウト・トラヴェルソ、リコーダー 1、2

すが きよみ

まえだ りりこ

いわい はるな

のざき まや

オーボエ、オーボエ ダモーレ、オーボ エダ カッチャ 1、2

第1群

さんのみや まさみつ

あらい ごう

第2群

こばな やすか

もり あやか

ヴァイオリン1

第1群

てらかど りょう、コンサートマスター

たかはし なお

ほりうち ゆき

第2群

わかまつ なつみ、コンサートマスター

あらき ゆうこ

いけだ りえこ

ヴァイオリン2

第1群

たかだ あずみ

たかぎし たくと
やまうち あやか
第2群
ひろみ しほ
えんどう ゆいこ
てらうち しおり

ヴィオラ
第1群
なりたひろし
あきは みか
第2群
はらだ あきら
ふかざわ みな

コンティヌオ(つうそう低音)

チェロ
第1群
やまもととおる
第2群
かみむら あやの

ヴィオローネ
第1群
こんのたかし
第2群
ふせ さくひこ

オルガン

第1群

すずきまさと

第2群

おおつかなおや

チェンバロ

おおつかなおや

ファゴット

こうふゆき

ヴィオラ ダ ガンバ

ふくざわひろし

(出演者一覧終わり)

曲目解説:てらにしもとゆき

受難曲とは、キリスト教の復活さいに先立つ受難週間に行われた儀式のための音楽で、新約聖書の4つの福音しょ(マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネ)におけるイエス・キリスト受難の記述を軸に、人類の罪をあがなうために十字架じょうで亡くなったイエスの物語を歌いあげたものである。受難曲の歴史は古くスタイルも大きな変遷をみたが、特にドイツのプロテスタント教会で発達し、聖書のテキストによる福音しかの語りと個別の登場人物や群衆の言葉によるろうしょうとともに、合唱のコラールや自由詩によるアリアを取り入れたオラトリオ風の受難曲が

バロック時代には盛んに作られた。

ヨハン・セバスティアン・バッハ(1685生まれ1750没)は1723年にライプツィヒ市音楽監督および聖トーマス教会楽長に就任した。彼は終生この地位にとどまることになるが、ここでは復活びに先立つ聖金曜日に聖トーマス教会もしくは聖ニコライ教会でオラトリオ風の受難曲が演奏されており、バッハにはこの受難曲の演奏行事を取り仕切る責任が課せられていた。そのため彼は後半生のライプツィヒ時代に数曲の受難曲を生み出すこととなる。残念ながら今日完全な形で残されているのは《ヨハネ受難曲》と《マタイ受難曲》の2つだけだが、2作とも当時のあらゆる音楽様式に通じていたバッハの多様な作曲技法と深い宗教的な洞察が融合した傑作である。

このうち《マタイ受難曲》は1727年の聖金曜日(4月11日)に初演されている。そして1729年に改訂再演され(かつてはこれが初演と考えられていた)、1736年にも改訂されて演奏された。今日一般に演奏されているのはこの1736年稿である。さらに1740年代にも何度かライプツィヒでこの作品は取りあげられている。

作品の原題は『福音史家マタイによるわれらの主イエス・キリストの受難 Passi Domini nostri J. C. secundum Evangelistam Matthæum(ラテン語)』で、バッハの作品の中でもとりわけ規模の大きな、叙事詩的かつ劇的な作品である。全体は大きく2部に分かれており、そのうち第1部は受難の告知からイエスの逮捕までを、第2部はカヤパの審判からイエスの埋葬までを描いている。物語はマタイ福音書第26-27章の章句(ルターによるドイツ語やく)に基づいて、主として通奏低音を伴うレチタティーヴォによって進められていく。その軸となるのがテノール独唱の受け持つ福音しかで、さらにバス独唱のイエス役をはじめ、様々な登場人物を独唱者た

ちが受け持ち、群衆や弟子たちの言葉を合唱が担当する。このうちイエスの言葉のみ、つうそう低音に加えて弦による和音が後光のように纏わり付くのが特徴的である。

そうした聖書章句によるつうそう低音付きレチタティーヴォが物語を進めていくのに対し、ピカンダー(バッハの多くのカンタータの詞を書いているライプツィヒの詩人。ピカンダーというのは筆名で、本名はクリスティアン フリードリヒ ヘンリーツィ)が書き下ろした自由詩による管弦楽伴奏付きのレチタティーヴォやアリオーソやアリアが、場面や状況をせいさつしたり、キリストの受難に対する思いを表現したりする。さらに共同体的な視点から受難の意味を表すべく、随所にプロテスタントのコラール(賛美歌)が挿入されていく。特にコラール、「おお、血と傷にまみれた主の御頭」(もともとの旋律はハンスレーオ ハスラーのせぞくか「私の心はちぢに乱れ」に由来)を受難の苦しみを示す受難コラールとして、詞と調と和声付けを変えながら5回も登場させて、イエスの苦難への思いを表していることは注目されよう。

2 群に分けた混声4部合唱と管弦楽の効果的な用法も特筆すべきものがある。合唱はコラール(コラールでは2 群がユニゾンで合体してひとつの4 部合唱になる)のほか、物語の進行にも関わり、ギリシャ悲劇のコロスのごとくせいさつを加えたりもする。第1部冒頭と第1部最後の壮大なコラールファンタジーは、この作品の合唱の用法の見事な例といえるだろう。一方で独唱のアリアも各曲それぞれに掘り下げた性格付けがなされ、また例えば第1部第20曲(新全集版の番号)のテノールのアリア「私はイエスの傍で目覚めていよう」での独奏オーボエや、有名な第2部第39曲のアルトのアリア、「神よ、あわれみたまえ」の独奏ヴァイオリン、第2部第57曲のバスのアリア、「来たれ甘い十字架よ、と私は言おう」の独奏ヴィオラ ダ

ガンバなど、しばしばいろいろなソロ楽器の助奏が歌手を先導したり、歌手とデュエットを奏でたりして、曲に彩りを添える。またイエスが捕まったあとの第1部第27曲ではひたたてられるイエスの様子を歌うソプラノとアルトの二重唱に合唱の叫びが挟まれ、さらにテンポを速めて裏切りものに対する怒りを合唱と管弦楽が荒れ狂うように表現するなど、劇の場面に応じた独自のスタイルの曲もある。音画的描写やおんけいによる象徴表現も随所に織り込まれている一方、壮大な全体はきわめて有機的に構成されている。

このような多様なしよほうやスタイルを駆使してのドラマティックな迫真性と宗教的な精神性の表現は、受難に対するバッハの奥深い洞察、さらにはその根底にあるバッハの敬虔なしんこうしんに発するものであるが、それが、人類が共通して持つ普遍的な宗教感情へと高められているところにこの作品の偉大さがあるといえよう。だからこそこの作品はドイツ・プロテスタントという宗派を超え、またキリスト教というひとつの宗教を超え、さらにはバロックという時代の枠をも超えて、音楽史上の不朽の傑作として今日に至るまで人々の心を惹き付けてきたのである。

残念ながらしふくの関係上、1 曲ごとの楽曲解説はここでは省かざるを得ないが、何よりもバッハの音楽そのものがそれを雄弁に語ってくれよう。十字架を背負ったイエスの歩みを描く緊迫した冒頭曲から、墓の中のイエスの安息を願う深い祈りの情感に満ちた最終曲に至るまで、言葉と音楽との一体化のうちにイエスの受難の物語を感動的に表し出し、その意味を聴く者に問いかけてくる巨編である。

(曲目解説終わり)

出演者プロフィール

すずきまさあき、指揮

1990年「バッハ コレギウム ジャパン(BCJ)」を創設以来、バッハ演奏の第いちにんしゃとして名声をはくす。グループを率いて欧米の主要なホール、音楽さいに多く出演、極めて高い評価を積み重ねている。近年はモダンオーケストラとも活発に共演し、多彩なレパートリーを披露。2001年ドイツ連邦共和国功労勲章功労十字小綬章、平成23年しじゅほうしょうなど受賞。12 年バッハの演奏に貢献した世界的音楽家に贈られる「バッハメダル」、ロンドン王立音楽院・バッハ賞を受賞。13年度第45回サントリー音楽賞をバッハ コレギウム ジャパンと共に受賞。15年ドイツ・マインツ大学よりゲーテンベルク教育賞を受賞。イエール大学アーティスト インレジデンス、神戸松蔭大学客員教授、東京藝術大学名誉教授、オランダ改革派神学大学名誉博士。

バッハ コレギウム ジャパン、合唱と管弦楽

1990年鈴木雅明により創設。音楽監督に鈴木雅明、首席しきしゃに鈴木まさとを擁する。世界各国から集まる古楽のスペシャリストとともに、オリジナル楽器を用いてバッハを中心とした音楽遺産の理想的上演を目指し演奏活動を行う。多数のCD 録音が高い評価を受けるほか、BBCプロムスやカーネギーホールなど世界中で活発な演奏活動を展開。2022年秋の9都市を巡る欧州公演、23年6月ライブツィヒ・バッハ音楽さいフィナーレへの招聘、24年8月BBCプロムスで数千人の

聴衆から熱狂的な喝采を浴びるなど、日本のみならず世界の音楽シーンを牽引している。第45回サントリー音楽賞を鈴木雅明と共に受賞。18年の年月をかけて完成した『バッハ：教会カンタータ全曲シリーズ』は、世界的にも貴重な成果として注目を浴び、「ヨーロッパのグラミー賞」と称されるエコークラシック賞を受賞。20年秋上演の鈴木まさと指揮・ヘンデル、《リナルド》公演が第19回さがわよしお音楽賞を受賞。

よしだ しもん、テノール

東京藝術大学音楽学部声楽科卒業を経てミュンヘン音楽大学修士課程独唱科修了。2016年からはヨーロッパの主要都市でソリストとして多くの演奏会に出演。18年秋にイタリア・ミラノで行われた国際コンクール『第9回コンコルソ サルヴァトーレ リチートラ』にて特別賞を受賞。20年春よりRIAS室内合唱団(ベルリン)にて史上初の日本人団員となる。井原義則、佐々木典子、故・永田峰雄、シルヴィア グリーンベルク、ヨアキム フォクトの各氏に師事。

ハナ ブラシコヴァ、ソプラノ

プラハ生まれ。ジリ コトーに学び2002年プラハ音楽院卒業。バロック、ルネサンス、中世音楽を専門とし、その声は「水晶の透明さ」「かがやかしくもニュアンス溢れる響き」(インターナショナル レコード レビュー)と評される。BCJ、コレギウムヴォカーレ ゲント、セツテ ヴォーチ、ラ フェニーチェ、ターフェルムジークなど国際的なアンサンブルと共演するほか、プラハの春、ユトレヒト音楽さいなどの国際フェスティバルに出

演。BCJとも多く共演し、20年、23年のヨーロッパ公演などでもソリストを務めた。ゴシックハープも得意としている。

やすかわ みく、ソプラノ

くにたち音楽大学、東京藝術大学大学院を経て、英国・ギルドホール音楽院アーティストディプロマ課程で学ぶ。Gold Medal 2023ファイナリスト。オペラではHurn Court Opera、《ドン パスクワレ》ノリーナ役で英国デビュー。2019年より拠点をイギリスと日本とし、これまでにバッハコレギウムジャパン、東京交響楽団、関西フィル等国内のオーケストラの他、英国にてボーンマス交響楽団、バーミンガム市こうきょう楽団(CBSO)、フランスにてパドルー管弦楽団等と共演。Celestial Voiceで出演した山田和樹指揮、CBSO《ファウストの劫罰》はBBCスリーでも放送された。令和四年度文化庁海外研修員。ロンドン在住。

マリアンネ ベアーテ キーラント、メゾソプラノ

ノルウェー国立音楽アカデミーで研鑽を積み、ハノーヴァー国立歌劇じょうのアンサンブル・メンバーを振り出しに、スカンジナビアでの主要な歌手の一人として名声を築き、ヨーロッパの数々のオーケストラや音楽さいに定期的に出演。ブロムシュテット、ヘレヴェツヘはじめ著名な指揮者との共演も多い。CD録音は50タイトル以上に及ぶ。BCJとの共演も多く、最近ではベートーヴェン《第九》、23年ヘンデル、《復活》、《ジュリオチェーザレ》、24年バッハ《ミサ曲ろたんちょう》等に出演し好評を博した。

あおき ひろや、カウンターテナー

東京藝術大学大学院で古楽演奏、エリザベト音楽大学で宗教音楽学を学ぶ。バッハの《マタイ》《ヨハネ》の両受難曲やカンタータ等の独唱を務め、BCJではライプツィヒ・バッハ音楽さいでの《マタイ》独唱等で喝采を浴びた。近年は指揮者としても高く評価されている。「パーセルプロジェクト」代表。ソロCDは『イルカーロサッソーネ -ハッセ・ヘンデル作品集』を2022年10月発売するなど8枚をリリースしており、レコード芸術特選盤に選ばれるなどいずれも好評を得ている。日本キリスト教団聖ヶ丘教会 教会音楽主任。青山学院大学聖歌隊指揮者。

さくらだまこと、テノール

東京藝術大学大学院修了後、渡伊。声楽を故平野忠彦、バロックから古典派の作品をレパートリーに国際的にも高い評価を得ており、国内外の古楽アンサンブルやモダンオーケストラと共演。クレモナ音楽さい《ウリッセの帰還》、エディンバラ音楽さい《オルフェオ》など主要オペラでも活躍。21年《マタイ受難曲》公演でのエヴァンゲリストは国内外でオンライン配信も行われ、高評を得た。2002年ブルージュ国際古楽コンクール第2位(声楽最高位)。東京藝術大学教授。二期会会員。

ヨッヘン クプファー、バス・バリトン

ベルリン、バイエルン、ゼンパーオーパーなど主要な歌劇場やコンサートホールから数多く招かれている。《ニュルンベルクのマイスタージンガー》、《ヴォツェック》、《カルメン》、《椿姫》など幅広い。シノーポリ、ブロムシュテットをはじめ、著名な指

揮者と共演を重ねる。録音では《冬の旅》、《ニュルンベルクのマイスタージンガー》のDVDが高く評価されている。2024年鈴木雅明とBCJによるブラームス《ドイツレクイエム》でソロを務める。16年バイエルン州から宮廷歌手の称号を与えられた。ヴュルツブルク音楽大学教授。

かくとおる、バリトン

東京藝術大学大学院首席修了。アカンサス賞受賞。BCJとの共演では多くの名演を共にし、2021年のメンデルスゾーンのアラトリオ、《エリ阿斯》ではタイトルロールを務め絶賛された。バロックからミュージカルまで幅広いレパートリーを持つほか、オペラでの活躍もめざましく、《ドンジョヴァンニ》、《ランメルモールのルチア》、《金閣寺》、《ルル》、《こうもり》、《午後の曳航》などに出演。23年《B to C》(東京オペラシティ、福岡)では現代音楽の演奏でも好評をはくす。メディア出演多数。洗足学園音楽大学非常勤講師。

(主な出演者プロフィール終わり)